

「オレオレ詐欺」を誘発する
日本語の特異な一人称代名詞の使用
— 家族への電話で掛け手の名乗りが避けられるのは何故か? —

What are the Linguistic Reasons of
Why Grandparent Scams Have Been Prevalent in Japan?

大 高 博 美

Abstract

Across Japan, con artists are now scamming parents and grandparents out of money by posing as children or grandchildren in distress. According to figures released by the National Police Agency, in the year 2014, around 55.94 billion yen was stolen through fraudulent schemes that tricked victims into sending money. This amount was 14% higher than the previous year. The number of confirmed cases for the year was 13,371, with 80% of the victims being people aged 65 and older. In this type of fraud, which began in 1999 in Japan, criminals pretend to be the victims' children or grandchildren, asking for money and claiming that they are in a dire situation. The scammer calls the parent or grandparent and says something like, "Hello. It's me. It's me. Are you my grandmother?" Then, the grandmother guesses the name of the grandchild the caller sounds most like, and the scammer takes on that grandchild's identity for the remainder of the call, using lies about repaying medical bills or other fees to trick victims into sending them money via ATMs.

This type of fraud occurs in the US, too. It is called "Grandparents Scams." The scammers often find their targets on the Internet by using social media websites such as Facebook because names, addresses, birth dates, someone's vacation plans, and telephone numbers are easily obtained at these websites. In Western countries, the scammer first identifies himself by saying the child's or grandchild's name. But in Japan, the scammer does not tell his/her name to the receiver on the phone. Instead, he/she just keeps saying "Ore, Ore! ('It's me, me')," at the onset of his calling. This Japanese practice may sound strange to English-speaking people.

The purpose of this paper is to explore linguistically the reason why in Japan, given names are not used as often in daily life as in English-speaking countries. In order to answer this question, two things were focused on in this

research. One is the tradition of secret names called “imina” (i.e. names given and used only by parents) that had been prevalent in Japan up until the Meiji Restoration (1870), and the other is the social/linguistic contrast between “uchi” (inside) and “soto” (outside) functioning as linguistic factors in the grammar of Japanese.

The conclusion of this research is that the tradition of secret names may have helped enhance the contrast between “uchi” and “soto” into Japanese psych over a long period of time, and this has also affected the grammar of Japanese (e.g. diexis in the use of pronouns, the use of honorific forms in the passive voice, etc.).

When a scammer calls a parent or grandparent, the caller may become hesitant to let his name known to the receiver on account of the latent practice of secret names. The most possible reason for this is that in everyday life, Japanese people usually do not refer to their first names when they introduce themselves, nor do they address their friends with their first names. In both cases, last names are given a priority over first names in daily use.

Hiromi Otaka

1. はじめに

警察庁が公表した2014年度特殊詐欺認知・検挙状況をみると、「振り込め詐欺」の被害総額は566億円と、統計をとりはじめた平成16年以降、最悪となった。「振り込め詐欺」の中でもっとも被害が多かったのは「オレオレ詐欺」で、被害件数（認知件数）が5,559件、被害総額は175億円である。翌年（2015年）も被害件数が5,806件で被害総額が173億円であるから、減少の傾向は依然見えていない。オレオレ詐欺とは、一人住まいの高齢者を狙って電話帳などを基に無作為に電話を掛け「オレだよ、オレオレ」などと子や孫を騙って金銭を巻き上げる犯罪行為である。その際は、相手に自身の困窮振りを伝えることで同情をかい指定銀行口座に金銭の振り込みを要求するのが通常である。2004年からは犯罪の手口が巧妙化したことから「振り込め詐欺」と呼ばれている¹⁾。

1) この名称に加えて「母さん助けて詐欺」「ニセ電話詐欺」「親心利用詐欺」なども使われる。さらに近年では「特殊詐欺」という言葉も生まれているが、これは振り込め詐欺とそれに類似する手口の詐欺の総称である。

警察や金融機関などがあれほど注意を呼びかけているにもかかわらず、なぜ被害が増加しているのかについては、様々な理由が挙げられている。例えば、「犯罪の手口が益々巧妙化しているから」や「超高齢化社会の到来で裕福な高齢者の数が増加しているから」などである（大塚 2013）。これらはどちらも理由としては正しいであろう。しかし本稿では言語学的な見地から、もう一つの潜在的な理由を指摘したい。それは、自己紹介時に自分の名前（英語でいうところの given name もしくは first name）を単独では使わないという日本語に特徴的な慣習からくるものである。例えば英語では、“How do you do? My name is John.”などと姓抜きで自己紹介できるが、日本語では普通「*初めまして、わたしは浩紀です」などとは言わない。「田中です」などの姓（family name）だけか、あくまで姓とセットで名に言及するのが普通だからである。

通常、名乗りは初めて会う人にだけするものだが、時により家族に対してもしなくてはならないときがある。認証目的の名乗りである。家に電話するときや夜遅く帰宅して玄関の戸を開錠してもらう際などである。このように家族に対して自分が何者であるかを知らせる必要があるときは、身内なので自分の「姓」に言及する必要はなく、名前だけで十分である。では、例えば電話で「もしもし、ボク浩紀だけど、おばあちゃんいる？」などと自分の名前を名乗るかといえば、必ずしもそうではないであろう。実際には、「もしもし、オレ/ボクだよ、オレ/ボク。おばあちゃんいる？」と一人称で済ますことも多いのではなからうか（本稿第2節でのアンケート調査結果を参照のこと）。だとすると、「オレオレ詐欺」は日本に特徴的に起こりうる犯罪といえる。勿論、この種の身内を装う詐欺は日本以外にも多い。例えばアメリカでは認知件数と被害額の両方で日本を上回るのである。米連邦取引委員会（FTC）の統計（2012）によれば、発生件数は2009年には743件だったのに対し、2011年以降は7万件を超える。被害額も、2003年には43億ドルだったものが、2006年には251億ドルと急増している。孫を装って金を要求することから、米国では「祖父母詐欺」(Grandparents Scam)と呼ばれている。ここで注意したいのは、アメリカでの上述の詐欺行為はあくまで「振り込め詐欺」であって「オレオレ詐欺」

ではないという点である。前者では、通常、詐欺師はインターネット（FacebookなどのSNSも含む）上で被害者の氏名、住所、電話番号、家族構成、さらには誰かが旅行中か否かなどを調べてからことに及ぶのであって（Shuette²⁾、「オレオレ詐欺」とは騙しのテクニックが異なるのである。十分な下調べがなくとも相手を騙せるのが日本の「オレオレ詐欺」の特徴といえよう。

本稿の目的は、なぜ日本社会では身内に電話を掛ける際に名乗らなくても自然なのか（逆を言えば、なぜ名乗ることに違和感を覚えるのか）について考えることにある。この日本語使用上での特異性が近年益々流行るオレオレ詐欺の温床となっている可能性があるからである。上の問いに答えるために、かつて日本社会に歴然と存在した諱（いみな）の文化と現代日本語にも体系的に存在する「内」と「外」の対立概念を詳しく考察する。これらは長い時間をかけて日本的価値観を醸成し、日本語による言語活動に影響を与えている可能性が考えられるからである。

2. 名前の機能

ここでいう「名前」とは、生物か無生物かに拘らず、ある特定の個体を他から識別するために与えられた記号、あるいは認証のための「暗号」もしくは「割符／合言葉」のような機能をもつものである。「ネコ」や「イヌ」のような分類学上の種類（ここでは科）に与えられたものも勿論「名前」（名詞）ではあるが、本節で扱う「名前」はあくまで個体識別用に与えられるもの（固有名詞）である。この種の名前は、通常、生物の個体にのみ与えられるが、慣習的に台風の名前（女性名）のような例外もある。

では、名前のもつ機能は個体の識別だけにあるのかといえば、勿論そうではない。例えば人名の「和夫」や「恵子」は、個体名としてだけではなく、性別や潜在的な国籍の情報まで内包している。さらには、名前には流行り廃りがあるので、名

2) Shuette Bill (State of Michigan Attorney General) :
<https://www.michigan.gov/ag/0,4534,7-164-18156-205169-,00.html>

前の持ち主の年齢層が推定できるときもある。また漢字名の場合は、文字の意味と選んだ音（音素）のもつ響きも名前ごとに異なるイメージを形成する³⁾。名付けに際し、特に後者に重点を置くようになった結果が、90年代から流行し出した、所謂「キラキラネーム」（もしくはドキュンネーム）である（牧野 2012）。名付けに際してはキラキラネームにも漢字が当て字として使われるが、奈良時代に使われた万葉仮名と同様に、表意文字としての意味にはさほど関心を払わない。ただ万葉仮名と大きく違うのは、字の選択に法則性がほとんど見られないという点である（例：虹空^{にくないと}、騎士）。最後にもう一つ、名前には忘れてはならない機能がある。それは、「愛称」という形を取って彼我の親近性を表しうる点である。つまり、名前は「内」/「外」の概念と表裏一体の関係にあるということである。

さて、先にも言及したように、名前の用途は個体を他から識別することだけにあるのではない。個体の真正性を認証する際にも機能を発揮するのである。ちょうどインターネットにアクセスする際に入力するIDやパスワードの機能に似ていると言える。個体の識別機能と認証機能は互いに似てはいるが厳密には異なる機能である。例えば家で親が子の名前を発するとき、それが呼びかけのための使い方（呼格）であっても三人称的使い方（主格）であっても、この際の用途は識別である。よって、通常、同一グループの構成員に同じ名前が付けられることはない。一方、電話時に掛け手が名乗る際は両方の機能が同時に働いている。だからこそ、正しく名乗られれば、受け手は相手が間違いなく本人だと確信することができ安心もできるのである。ところが、本稿の冒頭で述べたように、日本人は認証目的に自分の名前を使うということに積極的ではない。繰り返すが、この理由は、いったい何故なのだろうか。

3) 名前のイメージは有名人によっても醸成される。例えば「節子」という女性名は1928年から1950年まで女性の名前ベスト10の上位を占めたが、この人気は当時の大女優「原節子」に依るものだという（山口 2013）。

3. 家族への電話で名乗るか否かのアンケート調査

本節では、家族に電話する際にどのくらいの割合の日本人が自分の真正性の証明に名乗るのか（つまり「もしもし、オレだよ／ワタシよ」のような一人称代名詞で済まさない）かについて調べたアンケート調査結果を報告する。ここでの仮説は、筆者の経験を基に「日本人は電話時に家族に対してはいつも名乗るわけではない」ということである。少なくとも筆者は身内に対しては名乗りにくいと感じているが、この感覚は一般的日本人にとってどの程度当て嵌るものなのだろうか。そこには性差や年齢差からくる影響はあるのだろうか。また、どのくらいの割合の人が友人や家族との関係で「あだ名」（愛称）で呼んだり呼ばれたりしているのだろうか。これらを調べるのが本アンケート調査の目的である。

3.1 アンケートの質問

アンケート：以下は、電話をかける時どのように相手に自分を認証させるかについての質問です。

問1. 家族に電話するとき、あなたは最初に「もしもし恵子だけど・・・」のように自分の名前を名乗りますか、それとも「もしもし、わたしだけど・・・」のように一人称だけで済ませますか？下から一つ選び、記号で答えて下さい。

A：いつも名乗る

B：いつも一人称だけで済みます

C：両方のケースがあるが、名乗る方が多い

D：両方のケースがあるが、一人称で済みます方が多い

問2. 電話を掛ける相手が自宅ではなく、同姓の親戚宅（例えば血の繋がっていない伯父さんか叔母さん）だとしたら、どうですか？

A：姓と名前を言う

B：名前のみを言う

大高：「オレオレ詐欺」を誘発する日本語の特異な一人称代名詞の使用

C：一人称で済みます

D：名前と一人称の両方のケースがあるが、名前の方が多い

E：名前と一人称の両方のケースがあるが、一人称で済みます方が多い

F：相手との関係の深さによる

問3. では、電話を掛ける相手が異姓の親戚宅（例えば義理の伯父さんか叔母さん）だとしたら、どうですか？

A：姓と名前を言う

B：名前のみを言う

C：一人称で済みます

D：名前と一人称の両方のケースがあるが、名前の方が多い

E：名前と一人称の両方のケースがあるが、一人称で済みます方が多い

F：相手との関係の深さによる

問4. あなたは子供のとき親からあだ名（戸籍上の名前とは異なる呼び名）で呼ばれていた時期がありますか？

A：はい

B：いいえ

C：記憶にない

問5. 上の質問で「はい」と答えた方にお聞きします。あだ名の種類は何種類くらいあります（もしくはありました）か？

A：1種類

B：2種類

C：3種類以上

問6. では、子供の時（もしくは現在も）友達からあだ名で呼ばれたり、逆に自

分が友達をあだ名で呼んだりしたときがありますか？

- A. はい
- B. いいえ

問7. あなたはあだ名に対してどのようなイメージをもっていますか？

- A. 相手を茶化すようなどちらかといえば「否定的」なイメージ
- B. 相手との関係を親密化させる愛情表現の一種としてのイメージ
- C. その他（自由記述）

3.2 被験者

被験者は関西の大学で学ぶ19歳から22歳の日本人学生345人（男性158、女性187）である。上の質問を記したアンケート用紙を使い彼らに答えてもらった。実施時期は2016年4月から10月である。

3.3 回答の結果

上述のアンケート調査結果をまとめて集計したものが下の表である。男性被験者の結果（回答数と割合）は左の欄に、女性被験者の結果は右の欄に示してある。

表1：アンケート調査結果

質問番号と 選択肢	男（158名）		女（187名）	
	回答数	割合	回答数	割合
問1				
a	42	27%	79	42%
b	70	44%	53	28%
c	21	13%	39	21%
d	25	16%	16	9%
問2				
a	38	24%	49	26%
b	85	54%	99	53%
c	3	2%	15	8%
d	6	4%	3	2%
e	2	1%	3	1%
f	14	9%	18	10%

問 3				
a	93	59%	96	51%
b	43	27%	61	33%
c	2	1%	3	1%
d	0	0%	2	1%
e	0	0%	1	0.5%
f	17	11%	24	13%
問 4				
a	86	54%	99	53%
b	63	40%	72	39%
c	9	6%	16	9%
問 5		/86		/99
a	65	76%	47	47%
b	15	17%	40	40%
c	6	7%	13	13%
問 6				
a	155	98%	176	94%
b	3	2%	11	6%
問 7				
a	11	7%	4	2%
b	142	90%	176	94%
c	3	2%	7	4%

3.4 考察

上記の結果から、外出先から自宅に電話するとき「名乗らずにいつも一人称で通す」と回答した者は圧倒的に男性（44%）の方が女性（28%）よりも多いということが判明した。選択肢のD（名乗ったり一人称を使ったりの二通りあるが、どちらかといえば一人称で済みます場合が多い）を含めれば、一人称の使用を好むのは男性が60パーセント、女性が37パーセントということになる。逆に、選択肢Aの「いつも名乗る」と回答したのは、男性が27パーセントで、女性が42パーセントである。この結果は、実際のオレオレ詐欺で加害者となるのが圧倒的に男であるという事実と関連していそうである。

次に質問の2と3の結果についてである。ここから分かったことは、親戚宅に電話するときの一人称の使用は控えられるということである。もっと正確に言えば、

相手との関係（血のつながりの濃さ）に影響されるということである。それが証拠に、血のつながりのある親戚と義理の親戚が相手では、一人称の使用割合は大きく異なるのである（それぞれ男女の平均で53%と30%）。尚、相手が親戚宅でもいつもどおり一人称を使うと回答した被験者が女性に8パーセントいたことは特筆しておくべきであろう（男性は2%）。

最後に問4から問7のあだ名についての結果分析である。問4の回答から、被験者の半数以上が、性別に関係なく、子供時代にあだ名で呼ばれた時期（経験）のあることが分かる（男性54%：女性53%）。しかもその数は二種類以上だったとする回答も少なくなかった（男性17%：女性40%）。問6は相手をあだ名で呼んだ経験を尋ねるものだが、ほとんどが経験ありと応えている（男性98%：女性94%）。そして最後の問7はあだ名のイメージについてであるが、被験者のほとんどが肯定的なものとして捉えているということが分かった（男性90%：女性94%）。逆に、「相手を茶化す否定的な意味をもつ」と応えた者は男性で7パーセント、女性で2パーセントのみであった。次節では、歴史的にあだ名の起源とみなしうる日本の忌み名使用の慣習について考察する。

4. 日本社会に脈打つ諱（いみな）の文化

穂積（1926）によれば、東アジアの漢字圏には古来より諱（忌み名）の文化が存在したという。諱とは、読んで字のごとく、人前で使用が憚られる名前のことで、子供が誕生した時に親に付けてもらう「実名」のことである。元々は、高貴な人や故人に言及する際に実名使用を避ける文化（実名敬避俗）があり⁴⁾、後にこれが転じて実名を諱と呼ぶようになったとのことである⁵⁾。結果、実名は本人の霊的人格と深く結びついているために他人に知られてはいけないという発想（信念）が生まれ、「通

4) 穂積（1926）によると、この文化は漢字圏以外の国にも見られるという。例えばキリスト教でも、聖書の中でキリストに言及する際はむやみに実名を使わず「主」という言葉が使われる。

5) ただし、現代では「諱」は複数の意味で使われているので注意を要する。一つはいわゆる「戒名」と同じ意味で使われる場合もある。

称（もしくは「通り名」、「仮名（けみょう）」、「字（あざな）」とも呼ばれる）を併用する慣習が生まれた。ここに、筆者が想像するに、次節で扱う日本文化における「内」と「外」の社会言語学的対立概念が誕生したのである。

案外知られていないことなのだが、身分に拘らず諱と通り名を併用する慣習は綿々と近年まで続き、これが現行のように変わったのは明治3年（1870年）のことである。この年（12月22日）から2年後の明治5年（5月7日）まで毎年（三年連続）で太政官布告があり、法的に（つまり制度的に）諱と通称を併称することが廃止されたのである。結果、すべて国民は戸籍に「氏」及び「名」を登録することとなり、それまで複数の名（諱および通称ならびに号等）を持っていた者は、それぞれ自身が選択したものを「名」として戸籍登録することになったのである⁶⁾。要するに、西洋式の文化が日本に紹介・導入されたということである。

繰り返しになるが、上で見たように、日本社会には名前を内用と外用に使い分ける（つまり公私を区別する）という慣習が近年まで存続した。とすれば、この慣習が日本人の名乗り方に今でも何らかの形で影響を与えている可能性が考えられるが、実際は、疑問は深まるばかりである。もし古来より実名（諱）は家族内のみで使用するという慣習が日本文化の基層の一部となっているのだとしたら、では何ゆえに身内に電話を掛けるとき、英語話者による話し方とは異なり、相手に堂々と名乗らないのだろうか。つまり、認証用になぜ「和博」や「良子」のような名前ではなくて、「オレ」や「ワタシ」のような一人称が使われるのだろうか。代名詞は、直示体系（diexis）の観点からいって、使用者を認証する目的の語としてふさわしくないことは明らかである。

5. 日本社会における「内」と「外」の対立概念

本節では、まず内集団の意味で使われる「内」と外集団の意味で使われる「外」の両概念を社会学的な観点から詳しく考察する。この概念は、これまでの研究で、

6) ウィキペディアによる「諱」の項から：<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E8%AB%B1>

日本人のものの考え方の基礎の一部であることが分かっているからである。ただし、この概念は日本社会にだけ認められるのかと言えば、そうではない。通常、どの社会においても「公」と「私」は区別され言語活動に反映する⁷⁾が、これも広い意味では「外」と「内」の対立に関係しているであろう。

日本における「内」と「外」の問題については、これまで様々な研究者がそれぞれ成果を報告している。これについては大崎(2005)が詳しい。彼によると、例えば中根千枝(1972)による「ウチ」と「ヨソ」、米山俊直(1976)による「身内」「仲間」「世間」「同胞」、岩田龍子(1980)による「気のおけない関係」「馴染みの関係」「無縁の関係」、Midooka(1990)による「気のおけない関係」「仲間/味方の関係」「馴染みの他人の関係」「無縁の関係」などの研究がある。これらの研究で提案された「ウチ」と「ソト」関連の新概念(用語)を順に簡潔に紹介すると、以下のようになる。

まず中根(1972)における「ウチ」だが、これは学歴・地位・職業・資本家・労働者・性別・年齢などの一定の所属機関・地域のような自分が所属する「場」に基づく集団であると説明されている。「資格」のことではない。この集団は、「親分/子分」「先輩/後輩」のようなタテ型の序列によって繋がっており、人間関係は接触の長さ・濃密度により強弱が決まるのだという。「ウチ」の中では序列に従う言動が取られ、構成員は親分や先輩に対して自分の意見を強く主張することはできない。そして「ウチ」の意識が高まると、当然ながら、「ヨソ」の者に対して排他的になり、時には、敵意にも似た感情にまで高まるのだという。

米山(1976)では、中根(1972)の主張した「タテ社会」は必ずしも一律に存在するものではないことが示される。つまり、「タテ社会」は関東や東北日本に存在する文化で、関西や西南日本は「ヨコ社会」であるとの主張である⁸⁾。米山は、さ

7) 例えば、名前の愛称形はアメリカで日常よく使われるが、公の場においてはその限りではない(小西1976)。

8) 厳密にいうと、「タテ社会」と「ヨコ社会」は日本のどこにでも見られるものだが、前者は同族的な血縁一族制度が発達した「タテ社会」が中心で、後者は座・株仲間・村組織・町組に見られるような「ヨコ社会」が中心であったということである。

らに「世間」「同胞」「身内」「仲間」などの概念を駆使して「タテ社会」と「ヨコ社会」を説明するが、大崎（2005）によれば、米山（1976）の「身内」「仲間」と「同胞」「世間」はそれぞれ中根のいう「ウチ」「ソト」の概念に当て嵌る。尚、「世間」については井上忠司（1977）にも言及があり、「日本人はソトの世間に準拠して自分の行動をコントロールし判断する場合が多く、世間の動向にはとりわけ敏感で、ソトを知ることには非常に熱心である」と述べている。

岩田（1980）では、対人関係を三種に分けて論じている。まず一番親しい関係を示すのは「気のおけない関係」である。これは「なじみの関係」から発展したもので、お互いが努力して好意を維持しようとする必要のないほど親しい間柄である。つまり、互いに相手の好意をあてにすることが許されるほどの密接な関係のことである。よって、互いに無理を言っても許されるし、私的な質問をしたり悩みを打ち明けたりすることも許される。この関係に進む一つ手前の関係が「なじみの関係」であるが、そのためには十分な「接触の頻度と期間」、「パーソナルな接触」がなくてはならない。一方、もうひとつの関係を示す「無縁の関係」では、相手がたとえ社会に害を及ぼさない善良な市民であっても、粗野で冷たい態度を示す。つまり、「なじみの関係」と「無縁の関係」で取られる態度は正反対と言えるほど異なるということである。尚、岩田（1980）によれば、ビジネスにおいては長期的取引関係を前提とする「なじみの関係」が重要とのことである。

山下（1986）によれば、「ウチ」とは一種の運命共同体である。「ウチ」という言葉には核としての「わたくし」が存在する。ものを見る原点としての自分自身である。この「わたくし」の周りには幾重にも重なる同心円（異なる集団）があるが、自分を最初に囲む内なるグループは「家族」である。円の中心から外に向かうほど関係は親性を薄めるが、そこに定かな仕切りはない。親疎感を色に例えれば、そこには濃淡の差があるだけである。自分が属する集団は多岐に亘るが、すべて「ウチ」に属していると見なされるためである（例えばクラス、クラブ、学校、会社、アルバイト先、近所に住む友人など）。一方、「ウチ」を取り囲む「ソト」との間には明確な仕切り（厚い壁）が存在する。「ソト」の人とは、話し手にとって近い関係にな

い人々、例えば血縁のない人や他会社の人などである。

Midooka (1990) では、最も重要な日本的価値観 (最優先されるもの) として「和」が共有されていることをまず指摘した上で、先の岩田 (1980) による議論を基に、日本人の対人行動を規定する人間関係を次の四つに分類した。「気のおけない関係」と「なじみの他人の関係」⁹⁾ は、意味的に岩田 (1980) で提唱されたものとはほぼ同じと考えて良い。三つ目の「仲間／味方の関係」は、「なじみの他人の関係」より親しい間柄ではあるが、「上下関係」や「恩」「義理」が伴う点で同じではない。そして四つ目の「無縁の関係」は、字のごとく最も縁遠い関係を示す間柄で、日本語に特有な敬意を込めるコミュニケーション方法が取られないところに特徴がある。「上下関係」「恩」「義理」などに規定されない関係だからである。

遠山 (2001) は、日本語にはグディカunst (Gudykunst: 1993) の言う英語の “stranger” に相当する語がないことを指摘した。グディカunst は不安・不確実性調整理論 (Anxiety/Uncertainty Management Theory) を提唱したアメリカの異文化コミュニケーション研究者である。グディカunst (1993) の言う “stranger” とは、文化・民族・性・年齢・宗教・身体的障害・性的志向などで違いをもつ人々のことである。彼によれば、対人関係において “stranger” に対しては自ずと「不安 (anxiety)」と「不確実性 (uncertainty)」は高まるのだという。その結果、そこから生じる違和感 (strangeness) は、「知らない人」から「変な人 (奴)」、「外人」、「異人」へと度合いが徐々に上昇することになる。遠山が言うように、日本人にとって「見知らぬ人」「他人」「余所者」は、文字通り、単に面識が無い程度の間柄である。同じ民族に対し「異人」や「外人」に相当する語彙は作られていない。これは、日本は今まで長期的に他民族に侵略されたり支配されたりしたことがなく、「見知らぬ人」にはあまり警戒する必要がなかったからである。しかしこれからはどうであろうか。大崎 (2005) は、今や日本にも国際化の波が押し寄せ、異観・異形・異文化・異民族・異言語・異宗教・渡来の人に接することが徐々に増加しているの、これから少しずつ「見知らぬ人」「他人」「余所者」に

9) この関係においては「ホンネ」と「タテマエ」のうち「タテマエ」が優先される。

対する見方が変化してくるものと予想している。

さらに大崎（2005）では、先行研究の成果を引用しつつ独自の議論を展開している。まず「ウチ」として二重構造を考える。内内集団（「家族」「親友・親しい仲間」）と内外集団（「所属集団」）である。前者は親密性が高く、面子が共有される。そしてお互いに遠慮は不要なため、言いたいことが自由に言える。一方、後者の集団は、例えば会社や学校のクラスがそれに相当し、親密性では前者の関係ほど高くない。また、必ずしも面子は共有されず、言いたいことも充分言える間柄ではない。次に「ソト」の関係であるが、大崎（2005）は米山（1976）で提唱された「ソト」の二重構造性（「世間」対「同胞」）を否定し、「見知らぬ人」「他人」「余所者」を一つの集合体と捉えている。したがって大崎（2005）は、全体としては三重構造を提唱したことになる。

6. 日本語文法の中の「内」と「外」

本節では、言語表現から日本人の「ウチ」と「ソト」の意識を考察してみる。先節で概観した日本人の意識にみる「ウチ」と「ソト」の対立は日本語の文法中に規則として反映している可能性があるからである。

この分野での先行研究には、井戸（1992）、森田（1995）、牧野（1996）、田窪（1997）、坪本 他編（2009）などがあり、いずれも優れた成果を上げている。これらの研究によると、日本語の文法に反映されている「内」と「外」の意識は、様々な文法に見て取れるという。

まず、容易に気づきうるのは敬語表現における「内」/「外」に基づく違いである。西洋言語の敬語使用の原理については、Brown & Gilman（1960）が「力」（power）と「連帯」（solidarity）という二つの用語を用いて権力関係が反映する二人称代名詞による敬語の歴史を扱ったが、日本語の敬語においては「内」と「外」の概念でその原理が説明できそうである。原則として、話し手と聞き手（あるいは話題に上の関係者）との距離が遠いと認められれば何らかの敬語表現がなされるのが普通で

あるし、初対面のときは言葉遣いが丁寧でも親しくなるにつれてざっくばらんな物言いになることなどはその証左であろう。「内」なる枠組みでの親疎関係がどのように決まるかは話者の判断によることがすでに先節で言及してあるが、これを示す具体例が敬語表現中に見つけられる。例えば、会社で自分より年長の同僚に対しては「田中さん」などと敬称「さん」を付けて遇するのが普通だが、外からの電話での応対では「今、田中は席を外しております」などと敬語表現は使われない。家庭内では使われる「お父さん」「お母さん」が外にあっては「父」「母」と表現が異なることなども同じ原理による。つまり、日本語は「内」と「外」の違いを意識する言語であるからこそ、このような表現上での変化が生じるのである。

次に授受動詞の使われ方を見てみる。次の例文の下線部の動詞はいずれも英語での“gave”に相当するが、日本語では使い分けられる。理由は、主語の「父」と「先生」は両方目上の立場にあるという点では同じだが、前者と後者はそれぞれ「内」と「外」に位置する間柄にあるという点で異なるからである。

1. a. 父はわたしに小遣いをくれました。
- b. 先生はわたしに珍しい石をくださいました。

同様のことが、別の組み合わせの動詞「あげる」「くれる」にも言える。次の例文は英語に翻訳すると共に同じになるが、話者と貰い手（静子）の関係が「内」の関係にあるか「外」の関係にあるかで違っている。

2. a. 加藤さんは静子にお年玉をあげました。
- b. 加藤さんは静子にお年玉をくれました。

日本語の指示代名詞（コソアド体系）の使われ方にも「内」と「外」の意識が反映している。「これ」「ここ」「あなた」「こっち」などのコ系の言葉は話し手がいるところ、つまり話し手が自分の「内」と見なすところを指す。この位置関係は必ずしも物理的根拠に基づいて判断されるわけではなく、多分に心理的な判断に基づく場合もある（例：下のdの文を参照）。一方、「それ」「そなた」「そこ」「そっち」

というソ系の言葉は話者から見て「外」のもの、すなわち聞き手に近い（属する）ものを指す。そして「あそこ」「あれ」「あっち」というア系の言葉は、話し手と聞き手のどちらにも属していないものを指すのである。

3. a. ここへすぐに来てください。
- b. そちらへすぐにまいります。
- c. あそこへは行ったことがありますか。
- d. あの問題は難しかったね。

次に、いわゆる「迷惑の受身」（もしくは「自動詞の受身」と呼ばれる文法を通して日本人の「内」と「外」の意識を見てみよう。通常、目的語を必要としない自動詞は受身形を取らないのだが、次の例文に見られるように日本語は例外である。

4. a. 昨日は雨に降られた。
- b. 子供に先に死なれた。
- c. 従業員に帰られてしまった。

上の例文における三種の動作はいずれも自動詞による表現であるが、どれも話者にとって嬉しくないものとして受け止められている。ゆえに、受動的な表現が可能となっている。つまり、話者の力の及ばぬ外の事柄を我が身に降りかかった災難（心理的打撃）として内側で受け止める文法現象である。

最後にもうひとつ、人称代名詞の使用に看取できる「内」と「外」の対立を見てみたい。日本語は、周知の通り、一人称と二人称の語彙が豊かである。一人称の選択がどのようになされるのかといえば、基本的には話者が自分自身をどのような人間と判断しているかによるが（例：ボク / ワタシ / オレ / ワシ / ジブンなど多様）、使う状況がフォーマルかインフォーマルかでも左右される（例：前者の場合ワタシのみ）。ちなみに日本語の一人称の複数形は、二通りの意味解釈が可能である。話者側に立つ人々のみを指す場合と、聞き手を含めた自分たち全員を指す場合とである。「部長、我々の言うことも聞いてくださいよ」と言えば前者、「我々全員で決め

なくてはならない」と言えば後者である。このような使い分けにも、「内」と「外」が対立する枠組みとして使われていることが分かる。さらに、日本語においては一人称が時に二人称としても使われることがある点も見逃せない。逆に、親類関係用語を一人称として使う場合もある(5.bの例文参照)。

5. a. (子供に向かって) ボクは何歳?
- b. (子供に向かって) お父さんはおまえの意見に反対だ。

一方、二人称の選択は、相手を自分からどの程度近い存在として遇するか判断による(例:キミ/アナタ/アンタ/オマエなど多様)。よって、「内」の関係にあっても相手が目上の場合や「外」の関係にある相手の場合にはどの二人称も使えない。貴様(キサマ)、御前(オマエ)、貴方(アナタ)なども同様である。元々これらの意味には文語として敬意が含まれていたが、やはり目上には使えないのである。目上の相手は二人称ではなく役職名や親類関係用語を使うという慣習(文法)があるからである¹⁰⁾。ちなみに、「外」の関係にある目上の相手に対してはどのような二人称で遇すればよいのだろうか(例えば、前を歩いている年配の方が何かを落としたので呼びかけようとする場合などである)。興味深いことに、日本語の二人称の種類は多くとも、そのうちどれも適当ではないのである。ゆえに、二人称は使われず、「ちょっと」や「すみません」などの感動詞の使用が最も適当となる。

7. 結論

ここまでの考察でいくつかの知見が得られている。まず、日本には諱の文化が明治末まで存続したが、このことは古来より日本人が意識の中で「内」と「外」を対

10) とはいっても、どの語彙を選択するかは難しい面もある。例えば夫婦間では、「お父さん」「お母さん」が使用可能だが、子供のいることが前提となる。互いに名前で呼び合うことも考えられるが、あまり一般的ではないようだ。第三者に対して自分の配偶者に三人称として言及するときも、語彙の選択は難しい。夫については「主人」「旦那」など、妻に対しては「家内」「嫁さん」「女房」などがあるが、人によって受け止め方(許容度)が異なる。

立するものとしてもっていたことを彷彿させるということ。それが証拠に、この「内」と「外」の対立概念は、時間と共に日本語の文法中に徐々に浸透し規則として組み込まれるに至っているのである。話者が相手との関係（親疎感）をどう捉えるかで人称の使い方が異なりうることも、その結果である。

では、ここで主題を本稿での問いに戻そう。上述の「内」と「外」の対立は、冒頭で掲げた本稿の問いに対する答えとどのように関わっているのであろうか。まず、先のアンケート調査結果から明らかになったことを思い出してほしい。問3の回答から、電話の掛け手（話者）が冒頭でワタシ／オレなどの一人称を使って名乗ることをしないのは最も「内」なる集団である自宅に電話するときであることが分かる。言い換えると、家族以外の集団に属する人に電話を掛ける場合は、例えばそれが親戚関係にある者（つまり一種の「内」に属する集団）であっても、名乗ることにさほど違和感は少ないのである。要するに、家族という自分にとって最も近い「内」集団の者に対してのみ、認証目的の名乗りが避けられるということである。

この慣習は、一見すると、古来より諱の文化によって培われた価値観に抵触するようにも思える。諱は家族内で日常的に使われたのであるから、もしこのことが現代の日本文化に多少でも残っているのであれば、家族に向けて名乗ることに抵抗感がなくともよさそうなものである。しかしよく考えてみると、当時、家庭内で諱を実際に口にしたのは親、祖父祖母そして兄と姉だけだったのであることが容易に想像できる。その諱の所有者が自分に言及する必要があるときは一人称代名詞を使えば済んだし、他の年長者に対しては親類関係用語を使ったはずである。よって、一見すると、諱の文化は本稿の研究に無関係とも言えそうだが、実は必ずしもそうではないかもしれない。繰り返すが、諱は家族外に知られてはならないものであった。この価値観が今でも日本人の意識中に存続するからこそ、電話の冒頭での名乗りが苦手なのかもしれないのである。なにせ掛けた回線の相手が本当に自分の意図した集団かどうか、その時点ではまだ明らかではないのだから。よって日本人は、もし名乗った後に間違い電話であることが分かったらどうしよう、と無意識裡に恐れるのかもしれないのである。

本稿第二節で述べたように、名前は似て非なる二種の機能をもつ。一つは本人を他人から識別する機能であり、もう一つは話者が実際に本人かどうかを認証・確認する機能である。これらは異なる機能であるので、本来なら、自宅に電話するときでも「もしもし、良子だけど、・・・」などと名乗ることができるはずである。相手に自分を認証してもらう必要があるからである。しかし実際には、名乗りは積極的にはなされない。理由としては、先に諱関連で挙げたもの以外に、声色による識別が意識されることが挙げられる。言語音（特に母音）は、分節音としての音韻と話者の個性を反映する声色の二種類の音価を同時に所有する。よって名乗らずとも、通常は、話し手が身近な人であれば声だけでも識別可能なのである。これが第二の理由である。

最後にもう一つ理由と言えそうなものがある。最も基本的な理由かもしれない。それは、日本語では呼びかけや自己紹介時に名前だけを使うという習慣がないことである。誰かに呼びかける時には、よほど親しい関係にない限り（例えば家族内で目上が目下に対する関係）、その者を名前で呼ぶということはないし、自己紹介の時のように名乗るときにも名前だけの名乗りはないのである。田中や佐藤などの姓だけか、下の名前を言う場合であっても名前だけの名乗りはないのである。その時は必ず姓とセットか、姓だけである。この点は、英語圏の慣習とは大きく異なる¹¹⁾。

上述の姓とセットになった名乗りは自己紹介を目的とするもの（識別機能）だが、これが習慣化すると名乗りを認証目的に使うことにも消極的になってしまうのであろう。本来これらは異なる機能なので、名乗りの目的が認証にあることがはっきりしていれば、もっと多くの日本人が電話時に名乗りを利用するはずである。しかし、実際そうっていないのは、普段、自分の名を自分で使う機会をほとんどもたないという日本の文化（言語慣習）が影響しているのであろう。それが証拠に、家族以

11) 小西（1976 p.64）によると、同じ英語圏にあってもイギリスではアメリカほど first name を呼びかけに使わない。英語に“on first-name terms with”という表現があるが、文字通り、英国では親しい間柄にある者にしか名前での呼びかけをしない。

大高：「オレオレ詐欺」を誘発する日本語の特異な一人称代名詞の使用

外の親戚に電話を掛けるときには名乗る者が多いのである。これは、名乗りの目的が認証にあることを自覚しているからであろう。

参考文献

- 井戸祥子（1992）日本人のウチソト—認知弁えの言語使用『月刊言語』第21巻、第12号、pp. 42-53、大修館書店
- 井上忠司（1977）『「世間体」の構造—社会心理史への試み』日本放送出版協会
- 井波陵一（2008）使えない字：諺と漢籍『漢籍はおもしろい』京都大学人文科学研究所附属漢字情報研究センター編
- 岩田龍子（1980）『日本的センスの経営学』東洋経済新報社
- 大崎正瑠（2005）日本・韓国・中国における「ウチ」と「ソト」東京経済大学『人文自然科学論集』第125号、pp. 105-127.
- 大塚将司（2013）年間被害額450億円：急増する振り込め詐欺から透ける高齢者と若者の世代間格差 Business Journal 19回 http://biz-journal.jp/2013/12/post_3609.html
- 岡田英弘（1997）『妻も敵なり』クレスト社
- グディカンスト W. B.（1993）ICC 研究会訳『異文化に橋を架ける』聖文社
- 小西友七（1976）『英語シノニムの語法』研究社
- 田窪行則（1997）『視点と言語行動』くろしお出版
- 坪本篤郎・早瀬尚子・和田尚明編（2009）『「内」と「外」の言語学』開拓社
- 遠山 淳（2001）「不安・不確実性調整理論」石井敏・久米昭元・遠山淳編著『異文化コミュニケーション理論』有斐閣
- 豊田国夫（1988）『名前の禁忌習俗』講談社（講談社学術文庫）
- 中根千枝（1967）『タテ社会の人間関係』講談社（現代新書）
- Brown, R. and Gilman, A. 1960. The Pronouns of Power and Solidarity. In Sebeok, T. A. (ed.), *Style in Language*, 253-276. Cambridge, Mass: MIT Press.
- 穂積陳重（1926）『実名敬避俗研究』刀江書院：穂積重行による口語訳・校訂（1992）『忌み名の研究』講談社（講談社学術文庫）
- 牧野恭仁雄（2012）『子供の名前が危ない』ベスト新書
- 牧野成一（1996）『ウチとソトの言語文化学』アルク
- 森田良行（1995）『日本語の視点』創拓社
- （1998）『日本人の発想、日本語の表現：「私」の立場がことばを決める』中公新書
- （2002）『日本語文法の発想』ひつじ書房
- 柳田国男（1958）『日本における内と外意識の概念』筑摩書房

- 山俊直 (1976) 『日本人の仲間意識』 講談社 (現代新書)
山口諤司 (2013) 『名前の暗号』 新潮社 (新潮新書)
山下秀雄 (1986) 『日本のことばとところ』 講談社
李圭泰 (1995) 尹淑姫・岡田聡訳 『韓国人の情緒構造』 新潮社
連根藤 (1989) 『中国人のはらわた』 はまの出版
和辻哲郎 (1979) 『風土』 岩波書店
Gudykunst, W. B. and Kim, Y. Y. (1984) *Communicating with Strangers: An Approach to Intercultural Communication*, New York: McGraw-Hill.
Midooka, Kiyoshi. (1990) "Characteristics of Japanese-style communication" *Media, Culture and Society*.